国語

〈注　意〉

1 問題は 1 から 5 までで、18ページにわたって印刷してあります。

2 検査時間は**五〇分**で、終わりは**午前九時五〇分**です。

3 声を出して読んではいけません。

4 答えは全て解答用紙に**ＨＢ又はＢの鉛筆（シャープペンシルも可）**を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**

5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。**

6 答えは解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい。**

7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。

8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。**

9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

8―青　国　語

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 貨幣を鋳造する。

(2) 問屋から小売店に商品を卸す。

(3) 驚きのあまり、その刹那は我を忘れた。

(4) バターを湯煎にかけて溶かす。

(5) 文壇の双璧とされる作家の作品を読む。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 教科書のカンマツにある資料を参照する。

(2) パーティーはリャクシキの服装で参加しても構わない。

(3) 世界遺産としてトウロクされた地を訪れる。

(4) シタの位置を意識して英語の発音をする。

(5) 大会に参加したソウインは約五百名だった。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

一九三〇年頃の静岡県駿河湾沿岸地方を舞台にした話である。十吉の父、益三郎は馬をひいて荷物を運搬する馬方であるが、依頼人のもとに馬を届ける仕事もしていた。

栃木県の牧場から、益三郎は三頭の＊四歳馬を連れて来た。二頭は沼津と江尻で売って、家まで曳いて来たのは一頭だった。その日は夕方まで家の大戸につないであった。十吉は軒の土止めの石に腰掛けて、半日近く眺めていた。細身の＊鹿毛だったが、脚が太く、蹄は並みはずれて大きかった。十吉が＊竜の鬚の実を摘んで、胸へぶつけると、筋肉を顫わせて躍ねのけた。実が触れる前に、筋肉は反応するようだった。一瞬現れる充実した皺が、十吉の気に入っていた。彼はそれを、なん度見ても見倦きなかった。

牧場で飼葉を噛み終ると、突然顎で空気をたぐる恰好をして弾みをつけ、走り出す様子が、十吉には想像出来た。今彼の眼の前に憩っている胴体を、頑丈で撓やかな脚が軽々と運んでいた。少し離れているだけで、蹄の音は聞えなかった。純粋に視覚的な夢のようだった。鮮かで、怖れの影など一カケラもなかった。

夕方になると、十吉は馬を家の中へ入れた。一晩家において、翌朝まだ五時半ごろだったろう、大戸の柿の木の下へ曳き出した。柿の枝を透かして見ると、澄み切った空の奥に、星があるのが判った。そして、十吉の鼻先には、馬の息が親密な感じに流れていた。彼自身の息も、＊槇の生垣の暗がりに白く見えた。(1)益三郎は十吉の方をしばらく見つめていて、

――十吉、落着いて寝ていられないのか。どうだ、馬と一緒に来て見るか、といった。

――骨洲までか、と十吉は胸を弾ませていった。

――そうさ、と益三郎はいった。

十吉は頷いた。益三郎は、

――手を擦って待っていよ、といって、飼葉をこしらえた。

彼は桶の縁で天水の氷を割り、音をさせてそれを沈めた。そして、麦糠と藁を水で掻いた。彼は冷たいのを気にしていない様子だった。馬も平気だった。ただ、盛んな食欲を、十吉に感じさせるだけだった。彼がそばへ寄ると、暖かった。十吉は体を馬にくっつけて、霜の上に動く桶を見ていた。馬は鼻で桶を追い廻すようにして、飼葉を食べた。食べ終ると、元の姿勢に戻って、しばらく不思議な程動かなかった。十吉は馬の眼の真下から、そこに夜明けの経過が映るのを見ていた。

家では台所に二燭の電燈がついていただけだったが、やがて、雨戸の隙間から流れ出た光が、馬の胴を這っていた。朝飯の支度が出来たのらしかった。納戸では、＊余一が泣き出した。体の芯からしぼり出すような泣声だった。

――あの＊赤は＊腸で泣く、と益三郎は呟いた。そして、十吉をうながして、家へ入って行った。

朝飯を済ませると、＊カンテラを持って、二人は出発した。寒気は弛みそうもなく、蹄の音が冴えて、かなり遠い山に、まるで別種の音のように鳴っている谺と交錯した。それが、十吉には物めずらしかった。(2)しかし馴れて来ると、広い空間が、一致して、自分たちに調子を合わせているように感じた。

やがて、朝日が大井川から光の流れになって射し込み、少しずつ拡がって行った。だが、その橙色の光も見えなくなって、道は山の青い蔭の

中へ続いていた。山沿いの池は乾いて、大部分枯葦の原になっていた。真中に残っている水が、紺屋の甕の中のように青黒く見えた。彼らが通ると、雁が被害を受けた感じに鳴いて舞い上がり、いつまでも羽音を聞かせた。影の中を飛んでいるうちに、突然光が翼に射して、燃えるように見えた。十吉には、自分たちの頭上の、光の層が判別出来た。

——今に日なたが拡がって来るでな、と彼は自分にいい聞かせた。

鳩見沢の峠を越えると、下の盆地を陽が満遍なく浸しているのが見えた。十吉の感じでは、そこは光の海だった。そして、暖まった手先が痺れる気がするのも、光の作用のように彼には思えた。

道は濡れていて、益三郎は上りの時以上に、馬に気を配っていた。短い息だけの懸声で、馬の動きを抑えた。やがてなだらかな道になり、楽になった。大井川の太い水の筋が流れ込んでいる淵があった。淵の真中まで流れは突き出ていて、たゆみなく同じ動きを繰り返していた。そこは特に明るかった。*鳰が泳いでいたが、頭の黒点が水中に潜るのと、光の反射の中に紛れるのと、区別がつかないこともあった。

十吉は立ち止って、しばらく眺めていた。反射はもっと眩しくなって来るようだった。眼をこらしていると、かえって、なにもかも判らなくなる気がした。彼は瞬きして、足元の*澱の部分を見た。そこには氷の庇があって、流れの余波に軋んでいた。ギュウギュウいう音が、岩のうつろに響いていた。遠くでせわしく瀬の音がしていたが、氷の音はそれと全く異質だった。十吉は放心していた。しかし、速足で歩き出すと、澱を見ながらなにか考えていた、と思えた。なにを考えていたのか思い浮かばなかったが、特別な考えだったような気がして、こんなことを考える人が自分以外にあるのだろうか、と思ったりした。

益三郎と馬が、鷺が模様になって降りている田圃を横切っているのが見えた。十吉は駆け出した。追いつくと、粘る唾を飲み込みながら、黙って歩いた。

(3)——道草を喰っていて、迷っても知らんぞ、と益三郎は前を向いて足を運びながら、いった。

——一本道じゃあないか、と十吉は少し昂ぶった声でいった。

——崖から落ちたらどうする……、父さんも、だれも見ちゃあいない場所で。

——落ちて見たいわえ。

——ははは、落ちたら泣くに。泣いたぐらいじゃあ済みゃあせんぞ。

大井川の木の橋を越えて、台地へ上ると、一面の茶畑だった。最初は槇垣や木立に囲まれた家が点々としていたが、やがて、空と茶の葉だけになってしまった。十吉は、こんなに広い茶畑を見たことがなかった。頭上を駆け抜けて行く鳥も、空に融け込むまで、眼で追うことが出来た。

道は杉木立に入り、そこで台地は終りだった。益三郎がいつも、一段落ついた、と感じる地点だった。

——海だな、と十吉はいった。

——そうだ。お前も脚が強くなったの。浜まで来れたもんな、と益三郎は、馬を杉の木につなぎながらいった。馬は小刻みに蹄を動かして、乾いた土を蹴った。そして、す速く筋肉を顫わせた。夜明けからの*七里の道のりは無かったかのように、新しい精力を持てあましていた。その様を見ると、十吉の膝の裏に溜った疲れも、一気に消えてしまう気がした。

益三郎は枯芝に腰を下ろして、竹の皮の包みを開き、握り飯を出した。二人はそれを食べ、水筒の蓋で、交替にお茶を飲んだ。冷いお茶がうまかった。それほど、二人の体は暖かくなっていた。

海は馬の踝の高さに見えた。台地の縁に細い帯になって、二人のいる地点を取り囲んでいた。澄み切った真昼の空より、なん倍も濃く、硬

く耀く別の台地のようだった。それは水というよりも、石の一種のように、十吉には思えた。

——僕は船へ乗りたい。大い舟へ乗って、長いこと海にばっかりいたいや。そういう衆だって、骨洲には大勢いるずら、と十吉がいうと、

——骨洲の舟方衆の仲間へ入れてもらうか、馬方なんかやめて、と益三郎は応えた。

彼は、きせるから掌に落した火種を吸っていた。それから、煙の塊りを吐き、それが崩れて薄れて行くのを見ながら、笑っていた。

——馬方を儲けさせてくれるのは、浜の衆じゃんか、と十吉はいった。

(4)益三郎は少し表情を崩して笑った。しかし、それでも控え目にしか笑わなかった。笑おうか笑うまいかと、迷っているようでもあった。

——父さんは舟方が嫌いなんか。浜の衆は儲けさせちゃあくれんのか、と十吉は思った。

しかし、そんな曖昧さは、小さなことだった。(5)彼の胸では、二つの物が躍動していた。舟と馬だった。海の舟は彼のまだ知らない物だったから、想像しているに過ぎなかったが、それを彼が愛しているというより、それが彼を愛しているといえるほど、彼には、われを忘れさせるものだった。馬に夢中になる時と似ていた。そして、この二つの全く形の違った物が、彼の中では、よく似ていた。いわば彼は、馬からの類推で、舟を想像しているようだった。で、舟は生き物として彼には感じられた。

十吉は胸を弾ませて、海へ近附いて行った。まず出会ったのは、少し傾いた広い岩だった。まわりに波のしぶきが騰り、音をたてて岩を叩いていた。そして、霧になったしぶきは、彼の目の前を、小止みなく流れていた。遠くから見た海とは違っていた。静かに展けた眺めではなく、立ち塞がって、十吉に、挑戦することを促して来る感じだった。彼の体には力が籠った。揉まれている舟が、青く、嶮しい波の谷間のような所に見える気がした。その中に自分がいて、*大童になって活躍していた。海と張り合おうという十吉の気持が、一瞬、見させた場景だった。

骨洲川の縁へ出て、岸に沿って家並へ入って行くと、十吉はホッとした。海の声はまだつきまとい、あの途轍もない明るさは目に残ってはいたが、家がその光を制禦する物だということを、十吉は実感した。

（小川国夫「試みの岸」による）

〔注〕四歳馬——人間の年齢では二十歳に相当する馬。
鹿毛——体は茶褐色で、たてがみ、尾、膝下が黒い馬。
竜の鬚——植物の名前。
槇——樹木の名前。
余一——十吉の甥。
赤——赤ん坊。
腸——はらわた。
カンテラ——照明器具。
鳰——水鳥の名前。
澱——川などで水が流れないでたまっている所。
七里——距離を表したもの。一里は約四キロメートル。
大童——なりふり構わず一生懸命になっている様子。

〔問1〕(1)益三郎は十吉の方をしばらく見つめていて、――十吉、落着いて寝ていられないのか。どうだ、馬と一緒に来て見るか、といった。とあるが、このときの益三郎の気持ちを説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　夜も十分に眠れないほど、馬に夢中になっている十吉を見たことで、馬と遊ぶだけではなく馬を連れて歩いて行く厳しさを味わわせてみようという気持ち。

イ　早朝から起き出してきて、馬に寄り添うようにして世話をする十吉の姿から馬に対する熱意を感じ、自分の仕事に連れて行ってみようという気持ち。

ウ　昨日から今朝までずっと一人で馬を世話している十吉の熱心さに根負けして、気が進まないが今しばらくは馬と一緒にいさせてやろうという気持ち。

エ　寒さの中でも家に入らず馬のそばにいることをやめない十吉を心配し、いっそのこと自分の近くにいさせて無茶をしないように監督しようという気持ち。

〔問2〕(2)しかし馴れて来ると、広い空間が、一致して、自分たちに調子を合わせているように感じた。とあるが、十吉がこのように感じたのはなぜか。その理由を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　自然と一体となって落ち着いて歩む馬の様子に比べると、幼い自分は弱く頼りないものだと自覚し、初めて経験する広大な世界に圧倒されたから。

イ　馬の歩調が速くなり父の声も響かなくなったことで、あたりの静けさを不気味に感じ、暗闇が怖くなって早く目的地に着きたいと願っているから。

ウ　暗い道を歩いていると、連れている馬の足音が遠くまで特異な音に響くのが聞こえ、この場を歩いているのは自分たちだけだという気がしたから。

エ　父と馬とともに歩いていると、寒さや疲れを忘れるほど山から響いてくる音に包まれ、夜の神秘的な世界に自分たちがいることに興奮したから。

〔問3〕(3) ――道草を喰(く)っていて、迷っても知らんぞ、と益三郎は前を向いて足を運びながら、いった。――一本道じゃあないか、と十吉は少し昂(たか)ぶった声でいった。とあるが、このときの様子を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　十吉は初めての道中で夜明けを経験して夢中になり、父に遅れて慌てて追いついた。父はそんな十吉を理解しているが一言注意した。十吉は気持ちを静めつつも、表面では心配無用だと強がっている。

イ　十吉は初めての道中で考え事をしていたために、父に遅れて慌てて追いついた。父はそんな十吉をふがいなく思い突き放した。十吉はすっかり気落ちするが、表面ではもう子どもではないと反発している。

ウ　十吉は初めての道中で聞いた氷の音に驚き、父に遅れて慌てて追いついた。父はそんな十吉を理解しながらも苦笑している。十吉は父にすまなく思うが、表面では父の冷淡さに不満げな様子でいる。

エ　十吉は初めての道中で景色に心を奪われてしまい、父に遅れて慌てて追いついた。父はそんな十吉を気に留め厳しくしかった。十吉は父にしかられ反省するが、表面では自由にさせてほしい素振りでいる。

〔問4〕(4) 益三郎は少し表情を崩して笑った。しかし、それでも控え目にしか笑わなかった。笑おうか笑うまいかと、迷っているようでもあった。とあるが、このときの益三郎の様子を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　浜に着いても十吉が疲れる様子もなく熱心に馬を見ているので感心したが、将来は船に乗りたいと夢を語る息子に対し、馬方である父としては裏切られた思いがして腹立たしい様子。

イ　寒さの中で十吉が七里の道を歩いたことを頼もしく思っていたところ、馬の仕事だけでなく今度は船に乗りたいと夢を語る息子に対し、馬方である父としては誇らしげで満足な様子。

ウ　馬が好きでたまらない十吉が脚も強くなるほど成長したのはうれしいが、舟方にあこがれて船に乗りたいと夢を語る息子に対し、馬方である父としては残念で少し寂しそうな様子。

エ　幼い十吉が馬方の稼ぎを案じているのは滑稽で、さらに海にいたいから馬方をやめて船に乗りたいと夢を語る息子に対し、馬方である父としては稚拙で安易な考えを冷笑している様子。

〔問5〕(5)彼の胸では、二つの物が躍動していた。とあるが、どういうことか。このことを次のようにまとめたとき、□に入る適切な語句を、本文中より**十二字**で抜き出して書け。

馬も舟も十吉の胸の中ではともに力強く生き生きと躍動している。
十吉は海を見ながら舟が嶮しい波の谷間に揉まれている様子を想像している。
十吉は馬を見ながら馬が□を想像している。

〔問6〕本文の表現の特徴や内容について説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 夜明け前から朝方までの親子で行動した情景が描かれており、馬の筋肉の動きや蹄の響きを中心に描写することで、人間と生き物のつながりの大切さを表現している。

イ 夜明け前から朝方までの親子の旅の姿が描かれており、会話のやりとりを具体的に描写することで、親子関係のきずなが深まっていく様子を明確に表現している。

ウ 夜明け前から朝方までの親子が旅の過程で見た景色が描かれており、鳥の羽ばたきや氷の音などを描写することで、早朝のさわやかさを比喩的に表現している。

エ 夜明け前から朝方までの親子で山道を旅する様子が描かれており、随所で光の状態を効果的に描写することで、時間の変化や場所の様子を印象的に表現している。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「アート」という言葉は今日の日本語では、ファイン・アートつまり芸術を現代的な仕方で言い表す外来語として使用されることがほとんどである。けれどもここではそうした一般的な意味を少し離れて、アートという英語に本来含まれている歴史的な意味に戻って考えてみたい。アートという英語はラテン語の「アルス」に由来し、本来は技術や技芸、作法や物事のやり方といったきわめて広い意味を持つ概念である。アートは人為、つまり人間によってなされることではあるが、かならずしも自然と単純に対立しているわけではない。この点を理解することが重要である。

アートから作られる英語の形容詞に、「アーティフィシャル」と「アーティスティック」がある。「アーティフィシャル」には、自然にできたのではなく人間が作ったという単純な意味もあり、「ＡＩ」における「アーティフィシャル」とはそうした中立的な意味である。一方日常会話において「アーティフィシャル」という形容詞が使われると、中立的な意味の他にしばしば「ツクリモノの」「わざとらしい」といった意味を持ち、どちらかというとあまり好ましいニュアンスの言葉とは言えない。それに対して「アーティスティック」の方は「絵ごころがある」とか「芸術的な」「技の冴えた」「趣のある」など、概ねポジティブな意味で用いられることが多い。両方とも同じ技術という語を元にした言葉でありながら、この違いはいったいどこから生じるのだろうか？

美学の古典的文献とされる*イマヌエル・カントの『判断力批判』という本では、この技術という概念が、学問的知識や「自然」との関係において、広い哲学的な視野において議論され、規定されている。もっとも原文はドイツ語で書かれているので、アートではなく「クンスト（Kunst）」という語なのであるが、今はあんまりこだわらないことにする。本書では哲学史の解説をすることが目的ではないので、技術についてのカントの考察の中から、私たちがＡＩについて哲学的に考えるために重要と思われる部分だけを、いくぶん単純化してしまうことを覚悟で抜き出しながら紹介してみよう。

技術は、「自然」から区別される。それは、「行為」が「作用」とは異なり、「作品（行為の産物）」がたんなる作用の結果とは異なるということだと、カントは述べる。この箇所を読む上でまず注意すべきことは、「自然」という言葉の持つ含意である。というのも「自然」という概念の意味は過去二世紀という時間の間に大きく変わっており、この変化がしばしば西洋の古典的な哲学テキストを読む時に邪魔になるからである。

(1) 私たち現代人にとって、「自然」は過剰に美化されている。自然は現代人にとって好ましいもの、だが弱いもの、文明化の脅威に晒され、破壊から護るべき貴重な*リソース、といった含意を持っている。「母なる自然」、帰るべき故郷といったイメージも持っている。だが自然のそうした意味は主としてカントの時代に続く一九世紀、*ロマン主義以降の文化の中で作られたものである。それは同時に、産業革命が急速に進行し、人間生活が人工物に取り囲まれる環境へと変貌してゆく時代でもあった。現代の私たちの文化も依然としてその影響下にある。

しかしカントにとって自然とは、そうしたロマンチックな憧れの対象ではない。自然とはむしろ、物理法則に従ってひたすら作動する、巨大なメカニズムなのである。物理法則は、私たちが経験する世界の全体に及んでいるから、文明に対立する自然ばかりではなく、文明や人工物自体も、カント的な意味ではすべて自然の支配下にある。言い換えればそこには、現代の私たちが常識としているような、自然と人工との対立と

いうものはない。それを踏まえた上で、もしもカントが「人工知能」を知ったらどう考えるだろうかと想像してみるのは面白いだろう。現代人は「機械が心を持つか」といった問いに惹きつけられるが、おそらくカントにとってこの問いはまったく意味を持たないのではないか。機械であるかぎりにおいて――電子回路であろうが生きた神経細胞であろうが――心を持たないのは、定義上自明だからである。情報処理の複雑さがある閾値*を超えると自己意識や感情を持つようになるというような現代的空想は、一種の*オカルトではないかとカントなら疑ったのではないだろうか。

もちろんカント哲学においても、自然と人為の間には区別がある。自然は意図を持たないが、人間の行為は意図や欲求を持つからである。ここで欲求というのは欲望や衝動といった狭い意味ではなく、「こうすべきだ」という道徳的な欲求をも含んだ広い意味である。そうした欲求を持ちうることが、人間が「自由」であるということの意味である。(2) したがってカントにおいては、自然と人工の間に対立はなく、自然と自由との間にある。この違いは、初めて耳にする人にとってはピンと来ないかもしれないが、AIについて哲学的に考える際にいちばん重要なポイントなので、何とか心に留めておいてほしいことである。現代の私たちにとっては、人工物としての機械が自然と対立する。けれどもカントにおいては自然が機械であって、自然物であれ人工物であれ機械的に動く世界が、意図や欲求によって動く自由の世界と対立しているのである。

右でカント哲学の基本を紹介したのは、そこで考えられている技術とは何かということを正確に理解するためであった。自然と自由とは対立するけれども、自然と技術とは単純に対立しているわけではない。ではそれらはどんな関係にあるのだろうか？ (3) この、自然と技術との関係こそ、私たちがテクノロジーについて考察する際、AIとは私たちにとって何なのか、どのように向きあうべきかを考える上で、もっとも重要なことだと思うのである。そこで最後にそれを説明することで本章を終わりにしたい。

一般に技術とは、何らかの目的を達成するための手段である。そしてその目的とは、技術それ自体の外にある。靴を作る技術は、それを履いて快適に歩くという目的のために行使されるが、この目的は靴を作る技術それ自体と必然的に結びついているわけではない。革を加工したりする同じ技術は、靴を作って履くというのとはまったく異なった目的のためにも使われるからである。そうした、外部にある特定の目的のために行使されるというのが、技術のふつうの理解だろう。けれどもカントは、そうではない技術も存在すると言う。それは、技術の目的が技術の外にあるのではなく、自分自身の中にあるような技術、いわば外の助けを借りずに自力で目的に適っているような技術である。そうした、技術がそれ自身の目的に適っているような技術のことを「美しい技術」、つまり「芸術」と呼ぶのである。(4) これもまた、現代人の多くにとっては、芸術についての異様な定義だと思われるかもしれない。だがここで*本章の冒頭で引用した太宰治の作品の一節を思い出してほしい。鉄道の陸橋や地下鉄のような技術的産物を、主人公は幼い頃、何かの役に立つためではなくて、それがあること自体が楽しいから作られたのだと信じていた。それはつまりテクノロジーを「芸術」だと思っていたということなのである。

いよいよ核心に近づいてきた。技術一般は――それが外部に目的を持つという点において――自然と区別されるにもかかわらず、「美しい技術」つまり芸術は「同時に自然にみえる」ような技術であると、カントは述べているのである。もちろん芸術作品だって、それが人為的な制作過程によって生み出されたことを私たちは知っている。だが同時に私た

ちは芸術について、まるで作者は自由奔放に作っただけのようにみえる、などと言わないだろうか。そうした言い方の背後には、芸術において技術は機械的強制力として現れてはならず、あたかも自然の産物のように、作為なく勝手に出来上がったようにみえなければならないという認識がある。つまり技術と自然との間には、相互に照らし合う二重の関係が存在するように思えるのである。技術は、一方では特定の目的に沿ったものを制作するために機械的強制力を用いる活動なのだが、他方ではいわば自由な遊びとして、あたかも自然であるかのように現れることもある。技術はそうした二面性において考えられなければならないということである。

このことを先に触れた二つの英語形容詞に結びつけてみると、「アーティフィシャル」における技術（アート）とは自然との対立において理解された技術であり、それに対して「アーティスティック」における技術（アート）とは、技術でありながら作為が感じられない技術、「あたかも自然として」現れる技術として理解できる。大雑把な分け方をすれば、前者がテクノロジー、後者が芸術ということになるのだろうが、かならずしも現実の制度的な意味における、テクノロジーと芸術との違いに限定する必要はないだろう。テクノロジーにも常に自由な遊びという側面があり、また芸術にも意図や作為によってメカニカルに動いている側面はあるからである。その意味で、科学技術的な営みの中にも本質的なレベルでは芸術が含まれている部分があり、また反対に、常識的に芸術と呼ばれている活動の中にも、本質的には芸術と無関係な要素もたくさんある。(5) AIが驚くべき技術的達成であることはその通りなのだけれども、私はそれを同時に遊びとして、あたかも自然の所産として、また芸術活動としても見ているということである。

（吉岡洋「AIを美学する」（一部改変）による）

〔注〕イマヌエル・カント――ドイツの哲学者。
リソース――資産、資源。
ロマン主義――ヨーロッパで起きた思潮。情緒や自然を重視する。
閾値（いきち）――反応や変化を生じさせるのに必要なエネルギーの最小値。
オカルト――神秘的・超自然的な現象。
本章の冒頭で引用した太宰治（だざいおさむ）の作品の一節
――筆者は本文より前の部分で、太宰が幼い頃実用的な技術を面白い遊びとして捉えていたという内容の文章を紹介している。

〔問1〕(1) 私たち現代人にとって、「自然」は過剰に美化されている。とあるが、「『自然』は過剰に美化されている」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 自然は、カントによって技術と区別されているものなのに、私たちは、技術を自然の産物として区別することなく捉えていること。

イ 自然は、産業革命の急速な進行により破壊され続けているのに、私たちは、それを発展に必要なことだとポジティブに捉えていること。

ウ 自然は、意図を持たない自由な遊びとして認識されているものなのに、私たちは、技術を物理法則に縛られるメカニズムと捉えていること。

エ 自然は、機械装置のように法則に基づいて動く巨大なものなのに、私たちは、それを弱くて守らなければならないものと捉えていること。

〔問2〕(2) したがってカントにおいては、自然と人工の間に対立はなく、自然と自由との間にある。とあるが、このことについて次のようにまとめたとき、［　A　］、［　B　］に入る適切な語句を、本文中より［　A　］は**六字**、［　B　］は**十一字**で抜き出して書け。

カントの考えでは、心を持たない自然と人工は［　A　］世界という点では同じであるが、自然と自由は［　B　］世界であるかどうかという点で区別されている。

〔問3〕(3) この、自然と技術との関係こそ、私たちがテクノロジーについて考察する際、AIとは私たちにとって何なのか、どのように向きあうべきかを考える上で、もっとも重要なことだと思うのである。とあるが、筆者は自然と技術との関係の中でAIについてどのように考えているか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア AIは人間の設計による人工物でありながら、自然に判断を行うため、従来の自然物と人工物の二分法では説明できない。そこで、AIは私たちに新しい哲学的な物の見方を提案し、自由の概念さえも変えようとしている。

イ AIは情報処理の複雑さが増すと、やがて自己意識や感情を持つ可能性があるものである。したがって、私たちが現代の常識で考える自然と対立するというものではなく、AIは自然と自由の中間に位置する新しい存在である。

ウ AIは精緻な技術ゆえに物理法則に従っており、その意味では自然という大きなメカニズムの中に存在している。だから、私たちがAIに自己意識や感情の芽生えを期待するのは無意味であり、自由に欲望を持てる人間とは異なる。

エ AIは芸術と同様に、自然に見える技術であるため、自由奔放な動きをする恐れがある。しかし、「美しい技術」が楽しい物として評価される一方で、AIの高度な技術は何かの役に立つ手段として私たちに受け入れられている。

〔問4〕(4)これもまた、現代人の多くにとっては、芸術についての異様な定義だと思われるかもしれない。とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 現代人が欲する何らかの目的は技術によって達成されていくが、その技術は他の分野にも応用できるので、芸術作品を作ることだけが目的の芸術の方が高尚なものだから。

イ 現代人は、何らかの目的の達成のための意図的な手段を技術と考えて自然とは区別することが一般的なので、自由奔放に制作したように見える芸術と同様には考えにくいから。

ウ 現代人は、技術の成果はその目的を達成した産物によって示されると考える一方で、芸術の美しさはアートという英語で表される自然との調和にあると理解しているから。

エ 現代人が考える技術とは、技術の使用そのものを目的に私たちに課される機械的強制力のことであり、自然にみえる作品を自由に作り上げることを目指す芸術とは異なるから。

〔問5〕一方日常会話において「アーティフィシャル」という形容詞が使われると、中立的な意味の他にしばしば「ツクリモノの」「わざとらしい」といった意味を持ち、どちらかというとあまり好ましいニュアンスの言葉とは言えない。とあるが、この「アーティフィシャル」の意味で捉えた技術を筆者はどのようなものと理解しているか。次のようにまとめたとき、□に入る適切な表現を本文全体を踏まえたうえで本文中の語句を用いて**十五字以上、二十字以内**で書け。

技術は□と理解している。

〔問6〕(5) AIが驚くべき技術的達成であることはその通りなのだけれども、私はそれを同時に遊びとして、あたかも自然の所産として、また芸術活動としても見ているということである。とあるが、このことについて、この文章を学習した生徒たちが次のように話をしている。技術を芸術活動と見る筆者の考えで捉えた技術と人はどのように付き合っていくべきか、生徒Aから生徒Eの会話も参考にしながら、具体的な自分の経験をもとにして、あなたの考えを**二百字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

生徒A　AIを芸術活動として見ているって筆者が述べているけど、どういうことなんだろう。芸術は「自然に見える」ような技術って書いてあるから、AIが作った画像が自然に見えることについての考えかな。AIが作った画像を見たことあるけど、不自然な感じはしなかったよ。

生徒B　AIの技術は画像だけじゃないから、AIが日常生活の中に自然に入り込んでいるって意味かもしれないよ。実際にAIを搭載した電化製品は普及してきているし、AIの力で人と会話できるロボットもあるよ。

生徒C　そうだね。確かにAIに限らず、技術が広く浸透すると人々は特別なものだと思わなくなるし、すでに私たちはいろいろな技術を特に意識しないで自然に使っているよね。

生徒D　優れた技術が当たり前になりつつある世の中はとても便利だけど、人はいつの間にかそうした技術に依存してしまっているとも言えるよね。だから、もしも何かのトラブルで急に技術が使えなくなったら心配だな。

生徒E　だから、そういう心配すら感じさせないようにするのが、「美しい技術」だと思うよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、□内の文章は現代語訳である。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

西行の歌で、定家が最も高く評価したのは、「百人一首」に選んだ次の歌である。

歎けとて月やはものを思はする　かこち顔なるわが涙かな

この歌は、『山家集』『山家心中集』『西行上人集』「御裳濯河歌合」『千載集』などにも載るが、西行諸歌集には「月」や「恋」として一括されている歌群中にある。『千載集』には、「＊月前恋といへる心をよめる」という詞書のもとに載り、＊題詠であることを示す。この歌を定家は、＊右に挙げたすべての秀歌選集に採っている。「百人一首」は、定家が宇都宮入道蓮生から、嵯峨中院のふすまに張る歌の選定を依頼されたものという条件の中ではあるが、各歌人の歌を一首ずつ選ぶという企画なのであり、この歌は定家が最高に評価した歌だったのである。

月を見ていると、恋しい人のことがしきりに思い出されて、自然と涙がこぼれ落ちるという。これは過去の思い出を歌っているわけではなく、いま現在の心境として詠んでいるのであろう。月が物思いをさせるわけではない。それなのに月のせいだと一瞬かこちたくなるような私の涙であることよと、自分をやや突き放したところから詠んでいる。そこには、淡い自虐の念のようなものも感じられる。全体に、甘く苦い思いが漂っている。

それは定家のもっとも庶幾する（請い願った）歌の姿であった。この歌は「御裳濯河歌合」二十八番左にも自選しており、そこでは俊成によって、「＊心深く、姿優なり」と評されている。恋の懊悩を直截に表現するのではなく、穏やかな叙情に包んで表現したところを、俊成は好ましく感じたのであろう。

(1) 西行が自らの姿をやや突き放すように詠んでいる点は、次の歌なども同様である。

くまもなき折しも人を思ひ出て　心と月をやつしつるかな

（月が翳りなく照りわたっている折も折、あの人を思い出して流した涙で、わが心から月を曇らせてしまったことだなあ）

「くまなし」（隈なし）は、陰になるところがない、「心と」は、自分の心からの意で、この歌なども、自分を少し離れたところから客観視しようとしている点、また物語のひと齣を思わせる点などは、「歎けとて……」の歌に通じるものがあり、ともに定家の好尚に合致するものだったと思われる。

ところでこの「歎けとて……」の歌が、「百人一首」において、西行という歌人を代表する歌であるかどうかということに関して、現代の評者の中には、他にも優れた歌が多くある中でこの歌を選んだのは、定家の選び損ないだとする見方もなされている。しかしそうではあるまい。

(2) 多くの秀歌撰集に軒並み選んでいるところからみても、定家はこの歌に対して、確信をもって最高の評価を下したのである。

そのことは、西行のみならず他の歌人の歌についてもいえる。「百人一首」で定家が選んだ歌が、その歌人を代表する歌として不適当だとする見方は常にある。人により歌の見方がさまざまであるのは当然であるが、それが定家の選歌として適切であるか否かの判断は、軽々になされ

るべきではないであろう。定家は「百人一首」で各歌人の歌を、相当慎重に選んでいるのである。

西行の歌は、先行歌から少なからざる影響を受けているが、同時に、同時代並びに後代の歌に大きな影響を与えてもいる。例えば定家の代表的作品の一つとして知られる「*見渡せば……」の歌などは、先に触れたように、明らかに西行の「*心なき……」を踏まえて詠まれている。この歌をはじめとして他にも、定家の歌に西行の歌の影響がみられるものも、少なくない。

さらに付言すれば、影響を与えたのはむろん定家ばかりではない。良経、慈円、雅経など、同時代の他の歌人たちにも、多くの影響を与えているのである。

例えば次のような例がある。

あはれいかにたびゆくそでのなりぬらむ　このしたわくる宮城野の原（良経）

A　あはれいかに草葉の露のこぼるらむ　秋風立ちぬ宮城野の原（西行）

B　ほととぎすひとり心にまちとりぬ　外山のすそに落つる初音を（慈円）
　　ほととぎす深き峯より出にけり　外山のすそに声の落ちくる（西行）

C　露じもにはつせのひばらつれなくて　あらしにたぐふ入相の鐘（雅経）
　　暁の嵐にたぐふ鐘の音を　心の底にこたへてぞ聞く（西行）

D　夏の日をたが住む里にいとふらむ　涼しく曇る夕立の空（家隆）
　　よられつる野もせの草のかげろひて　涼しく曇る夕立の空（西行）

来てみれば寂びしかるべき家ゐかは　月もすみけり秋の山里（隆信）
鹿の音を垣根にこめて聞くのみか　月も澄みけり秋の山里（西行）

ああ、どんなに旅人の袖は露で濡れていることだろうか。木の下の草葉を分け入っている宮城野の原では。（良経）

A　ああ、どんなに草葉の露がこぼれていることだろうか。秋風が吹きはじめた宮城野の原では。（西行）

ほととぎすの声を一人で心待ちにしている。今、人里近い山の麓に落ちてくる、初鳴きの声を。（慈円）

B　ほととぎすは深い峰から出てきたことだ。今、人里近い山の麓に、その声が落ちてくるよ。（西行）

露霜のもとでも初瀬の地の檜の原はそのまま変わらず、山風の音に入りまじって暮れ方の寺の鐘の音が響いていることだ。（雅経）

C　暁の山風の音に入りまじって響いてくる鐘の音を、心の奥底に受けとめて聞くことだ。（西行）

暑い夏の日でも誰が住む里として嫌がるだろうか。夕立の後の空は涼しく曇っているよ。（家隆）

D　暑さでしおれた野一面の草がかげってきて、夕立の後の空は涼しく曇っているよ。（西行）

来てみると寂しいといえる住まいだろうか。いや、そうではあるまい。秋の山里では月も明るく澄んでいるではないか。（隆信）
鹿の鳴き声を垣根の中で聞くことしかできないのだろうか。いや、そうではあるまい。秋の山里では月も明るく澄んでいるではないか。（西行）

(3) このように西行による独創的な表現やそれに近い個性的な表現が、新古今歌人たちによって、頻用されるようになった例は少なくない。

ただ西行自身は、生涯にわたり作歌の道に精進を重ねてきたにも拘わらず、いわゆる歌壇と直接交渉を持とうとはしなかった。当時盛んに行われた歌合の場にも出席しなかった。実生活の上でも、真の自由を求めて草庵の修行生活をしたように、歌壇的な制約の下での作歌を嫌い、比較的自由な立場での作歌を志したのであろう。

その西行が、晩年に至り、『千載集』撰集の報に接しては、撰者俊成に歌稿と挨拶の歌を送って、自らの歌の入集を熱心に希望し、また一方で、それまでに詠んできた作品の中から秀歌を撰び、正続二編の自歌合を結構して、伊勢神宮に奉納することを企てる。すなわち、「御裳濯河歌合」と「宮河歌合」がそれである。

それまで歌壇と一定の距離を保ってきた西行が、ここに到って、なぜ勅撰集入集を希望し、歌壇の中心にいる人物に自歌合の加判を乞うたのであろうか。

(4) 思うにこれは、生涯かけて精進を続けてきた自己の詩的達成について、歌壇に対して、いわばその確認を求めた行為だったのではなかろうか。

俊成は西行よりも四歳年長であったが、壮年の昔より親交を結んでおり、西行の依頼に快く応じ、時を隔てずに加判を了えている。定家は未だ二十代半ばの若輩であったが、おそらく西行は、この依頼に若き定家に歌道精進の機会を提供する意味をも込めていたと思われる。

定家は、加判の相手は老大家西行であり、その判もなかなか進捗しなかったが、途中西行に幾度か激励・督促されながら、二年あまりかけて判詞を書き上げ、その草稿を河内の弘川寺で病床に臥していた西行のもとに届けている。

その返信である西行から定家に宛てた手紙が残されている（「贈定家卿文」）。西行は当時、重い病の床に臥して、起き上がれぬ状態であったが、人に三度読ませ、感激のあまり自らも頭をもたげて、休み休み二日かけて、定家から届けられた草稿を読んだと記されている。

この手紙で西行がとり上げているのは、「宮河歌合」九番である。

世の中を思へばなべて散る花の　わが身をさてもいづちかもせむ（左）
（世の理を思えば、すべては散る花のごとくはかない存在である。それにしてもこの我が身を、一体どこへもっていけばよいのだろうか）

花さへに世を浮草になりにけり　散るを惜しめば誘ふ山水（右）
（私だけでなく、花さえもが世を憂しとして、浮草のようになってしまったなあ。花が散るのを惜しんでいると、山川の水が誘いかけてくることだ）

左歌に対し、*「句ごとに思ひ入れて、作者の心深く悩ませるところ侍れば」とする評が、西行を大いに感激させたことはすでに述べた。

(5) 右歌に対しては、四句目は「春を惜しめば」とした方がよいのではないかという見解を定家が示したのに対し、定家の見方にいたく共感を示しながらも、やはり「散るを惜しめば」の方がよいことを述べ、最終的には定家もそれを受け入れている。

定家の歌合判詞には、西行に対する深い理解と敬意が滲み出ており、西行も満足と感謝の意を表明している。

判詞の中には、「心深し」の語が頻出するが、これは、西行の歌の特質と、それに対する俊成・定家の理解を示すものであろう。

（寺澤行忠「西行　歌と旅と人生」による）

〔注〕月前恋といへる心をよめる
——「月を前にした恋心」という気持ちを詠(よ)んだ歌。
題詠——前もって題を設けて詠んだ詩歌。
右に挙げたすべての秀歌選集
——筆者は本文より前の部分で複数の秀歌選集を紹介している。
心深く、姿優なり——情趣が深く、歌の風体が立派だ。
見渡せば……
——見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫(とま)屋の秋の夕暮れ

見渡すと、色美しい花も紅葉もないことだ。苫という植物で屋根を作ってある浜辺の小屋のあたりの秋の夕暮れよ。

心なき……
——心なき身にもあはれは知られけり鴫(しぎ)立つ沢の秋の夕暮れ

ものの情趣を感じる心のないこの出家の身にも、しみじみとした情趣はおのずから知られることだ。鴫という鳥が飛び立つ沢の秋の夕暮れよ。

「句ごとに思ひ入れて、作者の心深く悩ませるところ侍(はべ)れば」とする評が、西行を大いに感激させたことはすでに述べた。
——筆者は本文より前の部分で「句ごとに思いを込めて、作者の心を深く悩ませて詠んでいるところがありますので」と表現して定家の評を紹介している。

〔問1〕(1)西行が自らの姿をやや突き放すように詠んでいる点は、次の歌なども同様である。とあるが、本文の「歎けとて……」の歌と「くまもなき……」の歌について次のようにまとめたとき、Ⅰ、Ⅱに入る適切な言葉を、本文中よりⅠは**四字**、Ⅱは**三字**で抜き出して書け。

月を見ていてつい泣いてしまうのは、Ⅰではなく、私のⅡによるものだ。

〔問2〕(2)多くの秀歌撰集(せんしゅう)に軒並(な)み選んでいるところからみても、定家はこの歌に対して、確信をもって最高の評価を下したのである。とあるが、ここでの「軒並み」を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 数を増やすことに積極的である様子。
イ 物事の移り変わりが継続して途切れない様子。
ウ 比較するものがないほどきわ立っている様子。
エ すべてにわたって一様である様子。

〔問3〕(3) このように西行による独創的な表現やそれに近い個性的な表現が、新古今歌人たちによって、頻用されるようになった例は少なくない。とあるが、AからDの西行の歌において、「新古今歌人たちによって、頻用されるようになった」「西行による独創的な表現やそれに近い個性的な表現」を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　Aの歌においては、宮城野の原に吹いている風を敏感に捉えることで、季節の移り変わりを表現したこと。

イ　Bの歌においては、山麓で聞こえるほととぎすの鳴き声を、山から落ちてくると印象的に表現したこと。

ウ　Cの歌においては、自分が寺の鐘を聞いたときの感動を、心の奥底まで響いていると強調して表現したこと。

エ　Dの歌においては、野原一面の草がしおれている様子の描写を通して、厳しい夏の暑さを表現したこと。

〔問4〕(4) 思うにこれは、生涯かけて精進を続けてきた自己の詩的達成について、歌壇に対して、いわばその確認を求めた行為だったのではなかろうか。とあるが、このことについて次のようにまとめたとき、［　　］に入る適切な語を本文より**五字以内**で抜き出して書け。

筆者は、当時の歌壇が西行の詩的達成を［　　］と評価したと考えている。

〔問5〕(5) 右歌に対しては、四句目は「春を惜しめば」とした方がよいのではないかという見解を定家が示したのに対し、定家の見方にいたく共感を示しながらも、やはり「散るを惜しめば」の方がよいことを述べ、最終的には定家もそれを受け入れている。とあるが、このことについての筆者の考えを説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　西行は定家の指摘をもっともだとは思いながらも、若い定家が歌を修行することを期待していたので、自分の表現を学ばせ、定家も西行の意向を理解したと考えている。

イ　西行は定家の若さでは適切な批評は難しいと思ったが、やっと受け取った批評の手紙から熱意は認めたので、定家も西行の意見をありがたく受け取ったと考えている。

ウ　西行は定家の批評に反論し、年長である自分の影響は強いので、自論を認めさせて定家の編集する勅撰集への入集を促し、定家も西行の意図をくんでいたと考えている。

エ　西行は自身の表現が多くの歌人に波及するということを自覚していたので、定家の批評を受け入れず個性的な表現を貫き、定家も西行の意志を尊重したと考えている。

3
青
国
語